矢作川研究 No.12：73～85，2008

特集：田中　蕃氏追悼

矢作川研究所設立と運営に関わった田中蕃さんの素顔

―著作などから見える自然への思い―

間野　隆裕

田中蕃さんは，1935年満州大連にお生まれになり長春で幼少期を過ごされ，終戦後関西に引き上げてこられました．同世代の諸先輩と同様，物資のない困窮した生活を強いられたそうですが，その中にあって趣味は豊富で，昆虫採集のほか洋画や釣り，またテニスもしたといいます（1951，「MDKニュース４」）．この後昆虫採集は釣りと共にその一生にわたって人生を左右するものとなりました．

兵庫県立西宮高校卒業後は，新聞関連会社に就職し一家の経済を担ったそうです（1955，「MDKニュース８」）．しかし大学入学の夢を諦めきれず，甲南大学理学部に入学します．大学での専攻を「生物にしたい」と親御さんに伝えたところ，「生物では食べていけない」と諭され，専攻を化学にされました．

大学時代にも昆虫採集には余念がなかったようで，「採集に行けば必ず目的物を手に入れると言われ」（1955，「MDKニュース８」）るほど，採集技術も高く，この頃すでに多くの報文を書いておられます（業績目録参照）．

図１　ゼフィルスの一種アカシジミ1983年６月３日
豊田市御船町にて田中蕃氏撮影．

「日頃私たちは遠くからチョウの姿を見つけていち早く種名をいい当てる．斑紋，翅形が区別できないほどの距離において，それが的中する．これは体験によって培われた直観と認識によるものであろう．」（1981，「TSUISO 304」）

「物事の理解はその関心の深さによって決まるし，また関心へのとっかかりはその物事に対する人間からの働きかけから得られるものだと私は思う．私たちは虫を理解しようとすれば，絶えず虫に対する働きかけをする必要があるのではないだろうか．」（1977，「TSUISO 116」）

しかし，とうとう大学の指導教官から化学をしっかりと身につけるよう通達されてしまいました．この時のことを，「まったく耐えられない苦痛だった」と述べておられます．しかし大学で学んだ有機合成化学は，卒業後，本職の石杖となり，インキ技術の各種開発や特許取得など，研究職としての業績を残すこととなります．そしてその持てる知識と技術から，いくつかの会社で，後年研究のみならず支店長や開発部長，企画部長等重役として牽引されました．

『それまで一液UVでは困難とされていたPE，PET基材に密着するインキを開発，及び飲料用ボトル表面に印刷されたインキをアルカリ処理することにより印刷インキを剥離する技術の完成，またその製品・流通化に多大の貢献をした．そして次の特許取得に貢献した．・ゴムを骨格に用いたポリマーを使用した紫外線スクリーンインキ（１件）・アルカリ剥離インキ関連（４件）』（（株）早川ゴム　資料提供）

1959年には就職と共に名古屋市緑区鳴海に移り住み，新しい生活が始まります．地元名古屋昆虫同好会に入会されたのもこの年です．1960年代には昭和区に，38歳の1973年にはすでにその後の半生を過ごす豊田市に居を構えられました．

チョウの図鑑は1970年35歳の時に出版され，72年には生態図鑑を，翌年にはポケット図鑑を相次いで出版されました．それらはそれまで野外で頻繁に観察し，得た情報や標本による賜でした．田中蕃さんは，常に自然に身を委ね，自然の中から学び，そして自然は自らの偉大な先生であると思っておられました．

「（自然は）押そうが引こうが盤石の構えで，ひたすらありのままの姿を維持している．やっと語りかけに応じてくれるようになった自然は，私自身の心を映し出す鏡であった．」（1980，「森の蝶・ゼフィルス」）

「表現された形質のそれぞれが，その種の生活に必要な何らかの意味を持っている．そしてそれは機能的なものであろうと私たちは思っている．ただもう少し考えを進めて，その機能は単一目的のために作動するのではなく，それ自身が多目的機能を持つと同時に，他形質との複合によって，より深い意味を表現するのだと思う．そう思うと，私たちは偉そうなことをいっても，まだまだ何もわかっていないのだ，との結論に達するのだが．」（1981，「TSUISO 304」）

「真の生活史は，周辺のあらゆる環境との関わりの中で，昆虫たちがどのように生活しているかを知ることによって解明されたとすべきであり，単に卵から幼虫，蛹を経て成虫に至る経過すなわち生活環（life cycle）とは厳密に区別されるべきものである．」（1976，「MDKニュース 26」）

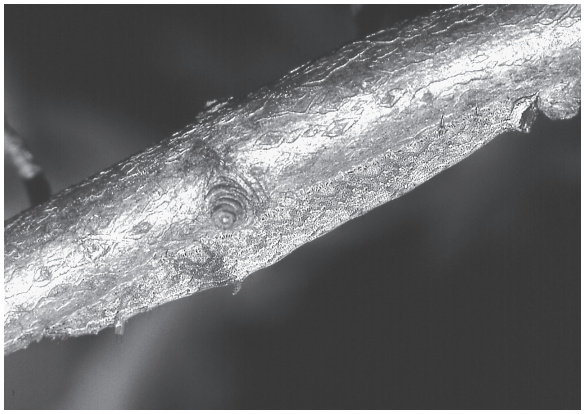

図２　田中蕃さんが初めて発見したカバフキシタバ幼虫．愛知県では絶滅危惧の稀少種になっている．豊田市にて田中蕃氏撮影．

田中蕃さんはチョウばかりでなく，ガ類についてもチョウと同様に大変興味を持っておられ，多くの報文を発表されています．また各種環境調査にも積極的に協力し，それ以外の昆虫に関しても幅広い造詣をお持ちでした．1980年から３年間にわたっては，環境調査会社に勤め，その手腕をいかんなく発揮されました．

『中部電力，北陸電力の発電所立地関連アセスメントをはじめ，愛知県下はもとより九州球磨川におけるアユ動態調査などにも従事し，各種調査業務を主導，支社長として総括した．』（環境化学（株）　永井正身氏私信）．

図３　田中蕃さんの指示で植えられた公園造成時のハンノキに自然発生したミドリシジミ．2007年６月20日豊田市御船町にて．

またチョウ採集を始めた当初から，ゼフィルス類に魅せられ，各地で調査されました．ゼフィルスに関する報文も，少なくとも28編を数え，出版された「森のチョウ・ゼフィルス」はその集大成とも言えるべきものです．

「「生きていくということは，実に大変なんだよ」と，人生談義のひとこまに，私たちはよく口にする．たしかにそうだろう．その思いやりをゼフィルスに投げかけ，彼女たちの生きざまを，可能な限り理解してやりたい．彼女たちとのつき合いが深まってくるにつれ，ほのぼのとした愛情が，いつのまにか私の全身からあふれそうに思えるのであった．」（1980，「森の蝶・ゼフィルス」）

その後それまでの調査データや経験の集大成ともいうべき論文を纏められました．それがチョウによる環境評価でした．

現在ではその報文は多くの論文に引用され，これをもとにした新たな評価手法が生まれています．

「人類文明の発達につれて，原始的自然は破壊され，しだいに人工的自然と生物の生息できない建造物におきかわっていく．そうした状況の中で，拡大の一途をたどる人工的自然から部分的に取り残された原始的自然にいたるまで，さまざまな自然環境とのかかわりをもちながら，現生の動物は生息し続けている．そこには作用と反作用をともないながら，種と生息環境との間に築かれた不可分の相互作用が存在するはずである．もしこの相互関係について詳しい情報が得られるならば生息種の確認は，それ自体がすぐさま環境の自然度を評価する貴重な資料となるに違いない．（中略）．蝶は，一般市民の間にもよく親しまれている昆虫の一群である．図鑑類も充実普及しており，幅広い層のひとびとによる確度の高い同定も見込まれる．また，生活史や生態あるいは行動などについての研究も盛んである．そして，なによりも生息環境についての知見が，現生の動物の中でもずば抜けて豊富といってよい．したがって，蝶を指標種（群）としてその生息状況から環境を評価することは，簡便な調査方法とたしかな評価技術が見いだされれば，精度の高い環境評価法として，その普及が大いに期待できる．」（1988，「蝶による環境評価の一方法」）

図４　ギフチョウの産卵したカンアオイを裏返す田中蕃氏．2002年４月14日岐阜県恵那市武並にて．

日本鱗翅学会には学生時代にすでに入会され，1984年から1991年まで評議員を経て自然保護委員を，翌1992年から2000年まで理事を歴任されました．17年間にわたる貢献でした．世界的な動物行動学者で著名なエッセイストである日高敏隆氏の会長就任に奔走されたのも理事の時で，95年には地元豊田市で日本鱗翅学会50周年記念セミナーを開催しました．当時市役所や県などの後援を頂き，日高敏隆会長と加藤正一市長，豊田加茂広域市町村圏事務処理組合（後の初代矢作川研究所所長）　松武義聰氏，矢作川漁業協同組合専務理事（兼矢作川研究所事務局長）　新見幾男氏に豊田市役所秘書課（兼矢作川研究所渉外担当）　村山志郎氏（肩書きはいずれも当時）による，矢作川の環境とその保全の必要性に関する座談会も開催され，セミナー報告書にはその様子も特集されました（1996，日本産蝶類の衰亡と保護・第４集）．矢作川研究所設立の翌年のことです．この頃には田中蕃さんは新見氏や村山氏と共に矢作川でアユ釣り太公望として知られ，川の自然に関しても積極的に調査活動をされておられました（1997，矢作川研究 1 ほか参照）．そしてのちに矢作川漁業協同組合の環境担当理事に就任します．

「清き流れの瀬の前に佇めば生きている自分の幸せを，息吹として感じることができる．いく星霜の彼方に営まれた我々の祖先の営みに思いを巡らせる．そういう思考展開も，自然の色に染められた，純な心根があればできそうに思う．川面に飛び跳ねる魚は…，それを狙う鳥は…，そして鳥の隠れている木立ちは…，緑に巣くう虫たちは…．すべての生き物が私たちと同じ地上に生活している．祖先も私たちと同じ様な自然の姿を，同じ思いを込めてみていた．と思えば歴史的自然を，祖先と共有できる．」（1998.４.３.，「矢作新報 “矢作川水辺叙情”」）

図５　田中蕃さんが精力的に調査されたウスバシロチョウ．

晩年の昆虫の研究テーマは分布拡大と縮小でした．分布拡大テーマの標的はウスバシロチョウでした．その分布拡大状況は，矢作川流域の20年にわたる343の記録をもとに克明に記されています（2006，矢作川研究 10）．

「ひなびた山里の中に，ひっそりと息づいているチョウ．それが少年時代から，ウスバシロチョウに対して抱いてきた，離れがたい私のイメージです．このイメージを打ち砕くように，矢作川流域のウスバシロチョウは，人里近くのチョウと化しつつあるのです．新緑萌える頃に現れる可憐な姿の中に，隠されたすさまじいばかりの生物のバイタリティがある．私は生き物の存在のすばらしさに驚き，今ではこのチョウの分布拡大を追うことに，ある種の使命感すら覚えています．」（1992，「Napi News 241」）

図６　全国的に絶滅危惧種となっているコキマダラセセリ．2006年７月５日豊田市三国山にて田中蕃氏撮影．

また，常々環境悪化にともなう生物の分布域縮小と激減を嘆き心を痛めておられました．2004年には名古屋市ＲＤＢを執筆され，亡くなる直前までの２年間は愛知県ＲＤＢ見直しの検討委員を務められました．特にそれまで幾度となく出かけられた海外遠征では，その豊かな自然を見るにつけ，危惧する日本の自然環境と対比するとともに，海外での抱える問題についても嘆いておられました．

「採集の功罪が云々されている現代の状況は，私の目から見ると明らかに異常だ．自然を保護するという課題の前に，大勢はひとたまりもなく「採ることは非」のレッテルを貼られる運命にある．しかしながら熱中する前にブレーキをかけられるならば，すべては無関心と化してしまうだろう．好奇心の否定は，人間性の否定につながる．自然科学は過去の業績の上に業績を積み重ねることが出来るとはいうものの，自然認識の過程は，残念ながら蓄積がきかない．一代一代同じことを繰り返すだけだ．見るだけで自然を楽しめといっても，それは無理な注文だろう．自然を深く理解する人々の輩出が，緊急の社会的要請だと思われるこの時期に，ハウ・ツーものの自然観察による促成効果の期待は，結果的にはその要請への逆行以外の何物でもない．私たちは，もっと伸びやかに，澄んだ目で自然を見るべきではなかろうか．」（1980，「森の蝶・ゼフィルス」）

「日本でも環境の様変わりを見る機会は多いが，発展途上国での様変わりはどうしようもないほどである．（中略）．秩序のない経済論理で現地の自然環境が蝕まれていき，それによって住民が必ずしも恵まれるとは限らないことに不条理を感じているという．（中略）．経済大国ニッポンでは，あまりに贅沢な時間と金を使い，環境保全を議論する．時にそれが開発のために儀式化していると思われることさえある‥．」（2006，「Napi News 308」）

図７　台湾調査現地研究者(両サイド)と，右より有田豊氏，田中蕃氏，筆者．1996年８月３日台湾の調査地にて．

『郷愁の昆虫酒場は・・・』『漂チョウのふるさと』『三河の国で讃岐の国の昆虫騒動』『自然母体への回帰を』『ホタルが教える人生模様』『自然環境の戸籍原本を』『冬なればこその光景ありて』『樹海の波頭と滝』．これはいずれも地元の地方新聞「矢作新報」に掲載された，田中蕃さんの書かれた記事の表題です．そこには洞察力に富んだ観察眼と，生き物と人の接点への鋭い切り込みを感じます．晩年田中蕃さんは，「自然のことや，それに対する自分の思いを書き

記す執筆活動をしたい」とおっしゃったことがありました．常になにがしかの調査やお仕事を抱えておられたため，なかなか思いを叶えられなかったのだと思いますが，その一つの実現の場が「矢作新報」での連載であったと推察します．亡くなる数週間前にも関わらず病床から新聞へ投稿するなど，最後まで執筆意欲は衰えませんでした．

「興味深いのはこのチョウ（著者注：チャマダラセセリ）の産卵が，広い草原の真ん中よりも，地道をえぐったような轍の縁（そこは跳ね返りの泥水を被ったような所），動物が踏みつけた足跡の際といった，ちょっとした段差のある場所の食草に多く見られることです．これを見ると，草地といえどもなんの攪乱もない環境では必ずしも生息の好適地とは言えないのです．草地のある山の環境が人為的に管理されることでなく，風雨によって地表が変化し，野生動物が踏み荒らしたり，人が住むようになって無作為な草刈りが行われる，そういう変化が必要なのでしょう．生き物をまもるには，実に細かい配慮が必要なのです．」（2007．5.11.，「矢作新報 “追いつめられた生き物たち”」遺稿）．

『心をつくる川』『アユ・その種の尊厳』『目覚める心・川は原点』『地球規模と矢作川・・・混濁の思考』『川の輝きの正体は』等の表題やその執筆内容からは，川に対しても人並みはずれた愛着を感じ，造詣の深かったことが窺えます．この地元矢作川の抱える環境問題を何とかしたいとの思いは，定年退職に１年を残しての矢作川研究所設立とその後の活動という形で具現化されました．

「風土に根ざした川としての矢作川の本性は，自然のままの時の移ろいと変化のなかで流れている間は，消されることなく続くであろう．よい川かどうかは，その歴史を維持しているかによって決まるのではないだろうか．」（2003，「環境漁協宣言 — 矢作川漁協100年史」）

「川は，誰が声をかけるでもなく人びとが集い，親交を温め，清らかな流れやせせらぎの音に心を癒す場であってほしいものです．川は大切な水資源であると同時に，醸し出す雰囲気が人の情緒に計り知れない大きな影響を与えます．」（2001，「矢作川研究所パンフレット “矢作川 水の賛歌”」）

「矢作川の自然というのは無償の資本であると思います．その質の向上，利子の積み上げを何としてもやらなければならない．何もしないということは，矢作川がせっかく無償の資本を与えてくれているのに，それを生かすことも殺すこともできずペイオフに陥るということになっていくんだろうと思います．」（2001，「矢作川研究７ “平成13度豊田市矢作川シンポジウム記録”」）

図８　天然アユ調査会での流下アユ調査の様子．1995年豊田市白浜町豊田大橋下にて

田中蕃さんの言動を見聞きするにつけ，一貫してそこに流れていたのは自然に対する慈しみと温かな気持ちではなかったかと感じます．常日頃はあまり他人に対して指示をされなかった田中蕃さんですが，書き記したものは，まさにご本人の思いが説得力ある言葉として伝わってきます．2007年５月21日膵臓ガンで逝去されましたが，田中蕃さんの自然への思いをしっかり受け止めながら，日々自然を見つめて，少しでもその仕組みについて明らかにしていきたいと思います．

「「自然との共生」と簡単に言うが，私たちは共生する相手の顔をよく知らない．相手の顔とその生活の姿を見て，共生に恥じないつきあい方を考えたい．」（2006.４.21.，「矢作新報 “追いつめられた生きものたち”」）

この小文を執筆するにあたり，日本蜻蛉学会会員　石田昇三氏，日本鱗翅学会　山本博子氏，環境化学（株）　永井正身氏，環境省自然公園指導員　市橋甫氏　早川ゴム（株），矢作新報にはお世話になりました．末筆ながら厚くお

礼申し上げます.

〔豊田市矢作川研究所総括研究員：〒471-0025　愛知県豊田市西町２-19　豊田市職員会館１Ｆ〕

図９　川調査でサンプリングする田中蕃さん.
1996年10月６日.

図10　渡辺一雄広島大学教授（当時）と共にギフチョウ調査．2002年４月14日岐阜県恵那市武並にて.

図11　矢作川研究所総括研究員であった田中蕃さんと新見幾男矢作川研究所事務局長（当時）の研究所「追い出し会」．2002年６月14日.

図12　日本蛾類学会大会にて．2002年２月３日.

図13　地元研究者同年４人組，右より田中蕃，市橋甫，成瀬善一朗（故人），高崎保郎の各氏．2002年５月25日佐藤正孝氏（故人）名古屋女子大学退官記念祝賀会にて.

図14　天然アユ調査会会合にて参加者と共に.
2005年１月13日.

田中蕃さんと四つの仕事を共にして

梅村　錞二

私は平成に入ってから田中さんとは四つの仕事を共にしてきた．その四つとは，矢作川天然アユ調査会，矢作川研究所，豊田市自然環境基礎調査会，矢作川漁業協同組合の各仕事である．

天然アユ調査会の創設は，平成８年９月であり最初から田中さんとは一緒に活動してきた．創立以来６年間は小生が会長をしていたので，毎回の要項作りは私が担当していた．当時の活動は，高橋勇夫氏の指導を受けながら，アユの産卵場調査，親アユの成長度調査，流下仔魚調査，明治用水頭首工魚道の遡上調査等が中心であった．会議では調査の精度を上げるために，調査員の個人の担当する仕事の内容まで決めて提案していた．この提案に対して田中さんからは一度も注文じみた意見をだされたことがなく，それだけ時と場所をわきまえ人間的に幅の広い人であった．調査活動には常に積極性があり，遅刻や無断欠席は一度もなく，模範的な調査員の一人であった．水中の調査が続き疲れていても最後まで精力的に協力いただいた．今でも思い出されるのは，高橋の上流で９月の残暑の極めて厳しい時に，河床からアユの産卵した栗石を引き上げ，老眼にルーペを重ねて黙々と数えておられた姿である．

矢作川研究所では，田中さんは創立から深く関わってこられた．私が研究所に関わるようになったのは，創立から数年経過して理事や所長になってからであるので，一緒に仕事をするようになったのはそれ以後である．日常の研究所の会議等では田中さんは研究顧問ということもあって，研究の内容や方法に関する発言が中心であった．それだけ研究熱心で，自分でも成果を上げてこられたし，若手のリーダーとして常に先頭に立って活躍され，所員の研究レベルや年報「矢作川研究」の内容をここまで高めてこられた業績は極めて大きいと言える．

豊田市自然環境基礎調査では，佐藤正孝会長を支えて副会長として全体の推進役と昆虫部門のまとめ役を担当し，立派に責任を果たされた．特に昆虫部門の多数の協力者の調査活動・執筆活動の中心として活躍された業績は誠に大きいと言える．

矢作川漁業協同組合では，学識経験者として私の後任を受けていただいた．また，「環境漁協宣言」の環境編の原稿執筆と評価委員長も歴任していただいた．常に科学的なデータに基づいて次から次へと提言をされ，役員や組合員からの人望も厚く，これからという時に急逝されたことは残念の一語に尽きる．

田中さんの性格は，温厚円満．行動は品行方正．常に深い愛情と誠意をもって周囲の人と接しておられ，多くの人から厚い信頼を得ておられた．たゆまぬ情熱と探究心を持つとともに，強い責任感と積極的な行動力で研究所の充実・発展のために尽力されたことは，極めて大きな成果と言える．田中さんの偉大なご功績を心からたたえるとともに，御霊の安らかなことをお祈りする次第である．

（前豊田市矢作川研究所長，財団法人愛知教育文化振興会常任顧問）

田中蕃先生を偲んで

松武　義聰

謹んでご冥福をお祈りします．田中先生との出会いは，平成７年の夏頃だと思います．日本鱗翅学会50周年記念セミナー全国大会を豊田市で開催するにあたり，相談をうけました．当時，私は豊田加茂広域市町村圏事務処理組合に勤めておりました．先生から蛾や蝶の話を聞き，これはためになる話ではないか，早速，管内市町村の担当者を招集し，主旨を伝えると共に，特に，自然を相手に多くの事業を展開している県の土木行政に携わっている人達にとって意議ある話ではないかと思いました．多くの人達が参加し，忘れがちな昆虫の存在を改めて認識しました．

研究所で一緒に働いていた頃，職員達がそれぞれの担当分野を目指して一心不乱に研究しておりました．「近い将来壁につき当たるのでは」との問いに田中先生は，「自然科学はエンドレスです．次々と疑問が出てきて，研究課題が増えてきます．」と答えられました．自分の無知さに気を落としました．

先日，日本鱗翅学会支部大会で海野和男氏の講演を聞くことができました．海野氏は，東南アジアやアマゾン川流域で蛾や蝶の生態を動画と静止画で紹介されました．驚いたのは，その種類と数の多さ，原色に近い赤とか，紫色の奇麗さ，そして，羽根や胴体には独特の模様が入っていることでした．さらに，地面や川原では，蟻など他の昆虫と争うことなく，仲良く水分やミネラルを吸収している姿でした．田中先生をアジアへ駆り立てた気持ちが初めて理解できました．その

成果を楽しみにしていた矢先，突然の訃報の知らせでした．昨年の新年会では二次会にも出席され，好きな歌を楽しく唱っておられました．今思えば，自分の体の変調に気づかれていたように思えてなりません．

昨年亡くなってから，ある寒い夜，腰までつかって，熱心に調査されている写真が紹介されました．私の心は深く痛みました．体に負担が少しずつかかり，体力を奪っていったのではないでしょうか．

これからは，田中先生のひたむきな科学への探究心を受けつぎ，皆で頑張ってゆきたいと思っています．短い間のお付合いでしたが，お世話になりありがとうございました．

（豊田市矢作川研究所常任顧問）

田中蕃さんを偲んで

髙橋　匡司

2007年５月21日，田中蕃様ご逝去との報を受けて目の前が真っ暗になるほどの衝撃を受けました．「愛知県稀少野生動植物」のチョウ類の見直し調査の経過報告と今後の進め方について愛知県がんセンターの面会室で打合せをさせていただき，その後，小康を得られて退院されておられた蕃様に再報告するためにお訪ねしようとしていた矢先でしたので吃驚しましたし大変残念に思いました．

私にとって，蕃様はチョウのみならず昆虫全般についての専門性を高める種々の切っ掛けづくりの機会を与えていただいた先輩であり，しかも兄貴のような存在の方でした．

1996年に愛知県旭町(現豊田市)での観察会で，「髙橋さん．ベトナム北部にチョウの調査に一緒に行きませんか!」とお誘いいただいたのが，つい先日のことのように甦ります．このベトナムチョウ類調査行が，私にとっての初めての海外調査であり，ムシ屋人生のスプリングボードにもなっています．その後，蕃様をはじめ名城大学の有田豊教授・豊田市矢作川研究所の間野隆裕様や各分野の方々とベトナム北部のタムダオ・クックフォン・サパやバベに計４回行きました．

蕃様とご一緒した最後の海外調査行は2006年５月連休のバベ訪問であり，若林守男様・間野隆裕様・李峰雨様もご一緒でした．バベ国立公園のレンジャーの方々に鱗翅目の自然保護のあり方や昆虫類のデータ集積の一環としての展翅指導などの企画から現地体験活動のリーダーとして蕃様が奮闘されました．その折り，昆虫少年のように眼を輝かして誠心誠意ご指導するお姿を拝見し感動しました．

毎回の国外訪問にあたり，国内での綿密な準備や訪問先の共同研究者との連絡など率先して進めていただきましたし，現地での関係者との折衝や交流も順調に進みましたのは普段と変わらない蕃様の律儀さから滲み出るお人柄によるものでした．また，物珍しそうに寄ってきた現地の子ども達にも分け隔てのない真摯な態度で接し，直ぐに仲良しになられ日本から持っていかれた飴などをあげて嬉しそうにニコニコしているお姿に接することもしばしばでした．蕃様の優しさ，周囲への配慮，時には毅然とした意志の強さが，関係者間の和やかな雰囲気を作り出していました．

「旭町の昆虫」(2001)や「豊田市自然環境基礎調査」(2005)などの発行にあたり，フィールド調査にもたびたび同行させていただきましたが，足場の関係で捕り損なっても返すネットでネットインされる技は実に見事でした．また，愛知県のレッドデータ見直し調査の一環で訪れた県境の三国山では，ヤマハンノキからミドリシジミの越冬卵を探し当てられるなど卓越した観察眼に感心したことなど，ご一緒させていただいた在りし日のご活躍振りが走馬燈の回るが如く次から次へと懐かしく思い起こされます．

2006年９月，髙橋昭様・小林広成様と訪れた上述の三国山が，蕃様との最後の調査行となりましたが，いつも学ぶことが多く楽しみでした．

今は，ただご冥福を祈るばかりです．

（日本鱗翅学会評議員・名古屋昆虫同好会幹事）

名古屋空港（ベトナムHANOIへと発つ日）で（左より有田豊教授，田中蕃様，間野隆裕様，髙橋匡司）

田中蕃さんの思い出

洲崎　燈子

初めて田中蕃さんにお会いしたのは1997（平成９）年の４月だった．

不思議なご縁だった．当時の矢作川研究所は田中さん一人が総括研究員として在籍されており，当時行われていた越戸ダム堰堤から鵜の首橋までの矢作川都市ブロックの河川敷の生物調査で，草本も含めた植物の調査を行える研究者を探していた．広島大学におられるチョウの研究者仲間に誰かいないかと問い合わせられたところ，河原の植物を研究している同大学総合科学部助手（当時）の中坪孝之さんを紹介された．中坪さんはさっそく現地の視察に向かわれたが，そこで目にしたのは河辺に竹林が繁り，広葉樹の大木が生える，普段研究対象としている石のごろごろした河原とは全く趣の違う河辺の風景だったので，母校早大の出身研究室で里山の研究をしている大学院生（私）に「普段自分が研究している河原と違い，タケが多く里山的な川なので，共同研究しませんか?」と持ちかけた．中坪さんと，興味を感じてその話をお引き受けした私は，広島と東京からシーズン毎に矢作川に植生調査に通うことになった．

初めて豊田市に来た日，田中さんは名鉄梅坪駅のロータリーで中坪さんと私を出迎えて下さった．ダンディな方だなという印象を受けたのを覚えている．この日は白浜公園とお釣り土場公園を案内して頂いた．ヒロハタンポポ（トウカイタンポポ）やニリンソウ，ホウチャクソウ，ウラシマソウとの出会いに感激し，夜は名鉄豊田ホテルのレストランで食事をご馳走になり，意気投合した．その後田中さんのご自宅近くのバーに連れて行って頂き，当時漁協の専務理事だった新見幾男さんに引き合わされた．その後，調査旅行のたびにこのような歓待を受けたが，中坪さんも私もかなりお酒を飲むので，相当な出費ではなかったかと今になって大変申し訳なく思う．

秋の調査のときだったと思うが，いつものように調査地への送迎をして下さっていた田中さんが，「来年度から常勤の研究員をとるんですよ」と言われた．できれば学位を取ってから就職したいと思っていた私に「（試験を）受けてみたら」と強く勧めたのが中坪さんで，研究職なら働きながらでも学位が取れるかもと考え，受験した．その結果採用して頂き，1998年春，それまで縁のなかった豊田に移り住んで矢作川研究所に勤めることになった．

研究所に入った年，矢作川研究所は今の市役所環境センターの２階にあり，常駐するのは私と白金研究員という，「研究所」どころか「研究室」とも言えるかどうかという感じの小さな所帯だった．初めて東京を離れ，それまでいた大学の研究室から市役所という全く違う世界に入り，できたばかりのポストについた私は何から何までとまどうことばかりだったが，それを話すと田中さんはいつも穏やかな優しさで励まして下さった．豊田に親類縁者がいなかったので，就職の際の後見人にもなって頂いた．田中さんは私が社会人になるきっかけを作って下さっただけではなく，就職したてで戸惑ってばかりの私を精神的に支えて下さる恩人だった．

その後，年月がたち，河川課にあった事務局も研究所に移ってきて，研究員も徐々に増えた．田中さんのご専門はチョウだったが，昆虫全般はもちろん，昆虫の餌資源である植物，水生生物，そして地形，地質，気象など，自然のあらゆる分野に造詣の深い「博物学者」だった．植物名を教えて頂いたことさえある．また，矢作川流域の隅々までご存じで，調査計画が定まって調査地を決定することになり，例えば「市内の水源林で川の周囲の地形改変が少ないところ」「河辺でまとまった広葉樹林のあるところ」といった条件が出てきたら，まず田中さんに該当する場所があるかお聞きするのが常だった．

田中さんは2002年に総括研究員を辞されたが，その前後を通じてさまざまな調査地にご一緒させて頂いた．その中でも印象に残っているのが，最初に関わった都市ブロックの調査と草刈り実験である．私が矢作川に関わるきっかけとなった都市ブロックの調査では，虫の目から見た植物群落の評価を教えて頂いた．たとえば芝生は見た目には美しくても，草丈が低いために隠れ場所がなく，夏は高温になって乾燥も激しく，虫にとっては緑の砂漠にも等しい空間であることや，混みあった竹林には食草や蜜源となる植物が少なく，タケ自体を利用する虫も少ないために昆虫相が貧弱になることなどである．また，５年間の調査成果を発表したシンポジウムで，田中さんは矢作川の河畔林を代表するいくつかの生物種として挙げたタマムシの話をされる際，「イメージの飛翔」という言葉を使われ正倉院の「玉虫厨子」にまで言及された．科学者でありながら，文学的・叙情的な表現を得意とされた田中さんらしいご発表だったと思う．一方草刈り実験は，田中さんの「堤防の草が刈られることでキリギリスがいなくなってしまった」という研究所シンポジウムでのご発言がきっかけで始まった．建設省（当時）のご協力を得て，竜宮橋上流右岸で堤防の亀裂等の有無を確認するために６月と９

月に草刈りが行われる際に，全刈り区とトラ刈り区（草刈り機の幅で縞状に草を刈る），刈り残し区を設けて頂き，刈るべき場所を刈った後に植生と昆虫の調査を行った．炎天下の河川敷での調査は相当きつかったが，トラ刈り処理が植物，昆虫の双方を残すのに有効な刈り方であることが実証された．トラ刈り方式はその後，市の占用区間の堤防で草刈りが行われる際の刈り方として採用された．

田中さんに初めてお会いしてからちょうど10年たった2007年の３月，入院先に研究所の女性３人でお見舞いにうかがった．ちょうど72歳のお誕生日であったため，花とささやかなプレゼントを持参した．田中さんは顔色もよく，口調もしっかりされていて，新しい治療法を試されていることなどを話して下さった．その後，病状のよくないことを伝え聞き心配していたが，まさかこのお見舞いの日から２ヶ月あまりで他界されるとは思ってもみなかった．この日が田中さんにお会いした最後の日だった．

矢作川流域を丸ごと，包み込むように愛し，矢作川研究所を育てて下さった田中さん．他界されてから改めて，研究員が研究面でも研究所の運営面でも，田中さんに頼り続けていたことをひしひしと感じた．私がこれまで受けたご恩は，まだ全く返せていないように思う．田中さんのように自然のあらゆる分野に通じることはできなくても，流域の生き物に向けられた田中さんの優しいまなざしを受け継ぎ，彼らを護るための研究を続けていくことが一番のご供養になるのだと信じている．田中さん，本当に長い間どうもありがとうございました．心からのご冥福をお祈りします．

（豊田市矢作川研究所主任研究員）

偉大なる博物学者が遺したもの

山本　敏哉

田中先生とは，私の大学院時の恩師が先生と古くからの知り合いで，その縁もあり私は矢作川研究所で研究員として赴任するに至りました．入所した当初はまだそれほど業務も多忙ではなく，矢作川流域の様々な所に調査などでご一緒したのがなつかしく思い出されます．

先生は偉大なる博物学者でした．自然を知ろうとする欲求と知識にはただ脱帽しました．その記憶に刻まれた出来事にこんなことがあります．あれは新緑の頃，矢作川の源流域を市民の方を案内することを目的に田中先生と同行した際，先生は河畔沿いの道端に茂っている草花を眺めながら次々と名前を説明してくれました．その数は50種以上にのぼったでしょうか．昆虫の専門家だと思っていた私には，きき慣れない草花に対する博識ぶりは大変印象深いものでした．またあるとき猿投山の方へ一緒に調査に行った折に，私が調査地点に歩いて向かう道中でみかけた爬虫類や両生類を何の気はなしに後で話したところ，「どうしてすぐに教えてくれないのか」と不満をもらされたのが記憶に残っています．聞けば，調査地点であるかどうか，調査の対象生物の如何を問わず，見かけた生物は可能な限り記録し，文書にまとめるための資料にしているとのことでした．この記録への執着も人並み外れたものがあったと思います．我々は先生の博物学精神を支えた「自然を知ろうとする想い」や「自然に対する愛着」，そして機会あるごとに嘆かれていた「失われる自然に対する憂い」を引き継いで研究にまい進していかねばと思っています．

しかし，矢作川研究所に赴任される前は，あくまで生物とは民間の企業人として重責を担った職務の傍らでの研究活動であったために，複雑極まりない自然生態系の中から重要なポイントとなる事象をとらえ，緻密な計画の立案のもと，厳密にデータとして切り取るという科学的作業は不慣れでした．このような経験不足もあって，先生の出された成果物には到達点がはっきりしない内容，あるいはただ発散した膨大なデータの集積に終始したものが多くなったのも仕方のないことです．もっとも私も「早く生き物マニアから宝となるテーマを見つけられる研究者へ脱皮しろ」と大学院時代に受けた試練の糧が十分に活かされているかどうかは怪しいところですが．

ただ，このような点があったにしても，先生が記された多岐にわたる自然誌資料と矢作川研究所という国内の他所で例をみない地域の研究所の草創期に貢献された足跡は実に偉大であり，この功績を汚すことなく，研究所設立によって与えられた「研究が地域に貢献できるチャンス」を最大限発揮できるよう努力することが所員の責務だと感じています．

今後，田中先生が遺した矢作川研究所を引き継ぎ，先生の目指したものを一つでも実現できるよう，少しずつですが着実に前進していきたいと思います．どうか見守っていてください．

（豊田市矢作川研究所研究員）

田中先生の想い出

白金　晶子

研究所玄関の自動ドアの開く音がすると，「田中先生が見えたかな？」「あっ，もう見えることは無いんだな….」と頭の中でやりとりする日々が続いています．

田中先生は私が“研究”に携わって得た最初の恩師でした．研究者というのはこんなに何でも知っているものなのかと驚嘆しました．矢作川での調査にご一緒する度に様々な質問をし続けましたが，あらゆることについて一つ一つ丁寧に答えて頂きました．研究者についてよく「専門馬鹿」というような言葉を言われますが，田中先生はそれとは正反対の方でした．「私はそのことについては専門外ですからちょっと…」というような言葉を田中先生からは聞いたことは一度も無いように記憶しています．どんなことでも疑問に思えばとことん調べて，納得し，文章にするそんな方でした．「矢作川研究」の創刊号で「矢作川流域の自然（その概要）」を書かれた時も，矢作川流域の地形，地質，気象，そして動植物について数多くの資料を収集され，読み込まれていましたが，新たな知識を得ることを非常に楽しんでおられ，「文章を書き始めたら止まらないよ」と仰っていたのが思い出されます．

田中先生は恐らく「すべては繋がっている」ということをいつも意識し，研究をされていたのだ，とこの追悼文を書くにあたり，田中先生のこれまでの行動や言動を振り返ってみて気付きました．矢作川の都市ブロックで行った河畔林調査，古鼡プロジェクトで行った横断面調査などでも，様々な分類群の動植物を採集し，名前や数を調べ，それらの繋がりを知って始めて，その環境についてものが言えると考えられていたのだと分かりました．私達には複雑すぎて見えていなかった，人間を含めた矢作川流域の大きな繋がりが，田中先生にはおぼろげながら，見え始めていたのかも知れません．

田中先生から頂いた多くの知識，自然を多方面から見るまなざし，そして自然に対する飽くなき探求心を少しでも受け継ぎ，継承していかなければと思っています．田中先生が慈しみ，真摯な態度で研究をし続けてきた矢作川流域の自然，そこに棲む人々や野生生物がより良く繋がるための調査・研究を続け，矢作川を慈しむ人が一人でも多く生まれるようにしたいと思います．

（豊田市矢作川研究所研究員）

田中蕃さんの想い出

内田　朝子

知り合いの死とは，「その人とは，二度と心を通わせられないことだ」と，誰かが言っていたのを思い出す．「蕃さんは，どのようにお考えですか？」と問うても，蕃さんの答えは叶わぬことになったということである．この事実は私にとって辛く，重い．

田中蕃さんとの出会いは1994年である．矢作川に藻がおびただしく生えて往生しているという噂は小耳に挟んでいた．当時，私は大阪府豊中市にある環境調査の会社に勤務し，水生生物の同定分析の仕事に従事していた．

田中蕃さん自らが矢作川で異常発生しているという藻のサンプルを持参され，同定を依頼された．私は藻類図鑑を参照し，その藻をカワシオグサ*Cladophora glomerata*と同定した．手みやげに名古屋銘菓を購入してくださったとのことだったが，蕃さんに同行された方が新幹線の車中に置き忘れられたとのことで，深く詫びてくださったのを覚えている．

カワシオグサで川底が緑色になっているという話は，それまで聞いたことがなく興味深かった．是非，その光景を一目見たいと思った．仕事の調整がついて，矢作川のカワシオグサを見に行くことになったのは，1994年の７月末だった．すでにカワシオグサのピークは終わり，恐ろしいまでの繁茂実態を見ることはできなかった．蕃さんの運転する車に乗せていただき，豊田市の中心市街地から矢作川に沿って矢作ダムの上流，すぐそこが長野県だというところまで案内していただいた．その夏は平成の大渇水と称される年であった．道中，矢作川でどうしてカワシオグサが異常繁茂するのか，その謎をなんとか解明したいという蕃さんの熱い思いがひしひしと伝わってきた．

矢作川について全く知識のなかった私は，思いつくままに藻類が川で異常繁茂する要因をあれこれ話してみたが（今，思い返すとあり得ないストーリーも含んでいたように思う），蕃さんはそのどれをも否定することなく耳を傾けてくださった．生き物のことはわからないことだらけなのだと，どんなに些細なことであっても，そこにヒントが隠されている可能性が

あると言ってくださった．当時の私は，藻類の同定作業に日々追われていただけで，藻類の専門家と言うにはほど遠かった．そのような者の意見でも真摯に受け止めてくださった．一方的に言いたいことだけを言い，こちらの意見には聞く耳を持たないという人が多いなか，蕃さんの懐の広さは，私にやる気をもたらしてくれたことは確かである．

その後，一身上の事情によって，いったん矢作川研究所とは疎遠になったが，2000年の春に家族で愛知県に移り住むことになった．私が，現在，こうして当研究所でお世話になり，矢作川とねんごろになれたのも田中蕃さんのご尽力のたまものである．人生には，本当に不思議な縁があるものだとつくづく思う．赤い糸ならぬ緑藻の糸で繋がっていたのだろうか．

2007年に入ってからだろうか，蕃さんは研究所に出向いてこられると同時に「あー，もうあかん!」を連発されるようになった．いつもの蕃さんの「嘆き節」と聞き流していたが，お体を病んでおられたのだ．それでも力の限り，平戸橋周辺を「水と緑の博物館」として整備するという新しい事業計画を立案されていた．微力ながら役に立てるならと一緒に現場を視察した帰りにそば処「六三（ろくさん）」で食事をしたことがある．「本来，僕はよく食べるほうだが，食欲がない」とざるそばだけを注文された．私は，やっと蕃さんの体調不振の深刻さを知った．

田中蕃さんにご指導いただいたこの7年の間，蕃さんの矢作川を科学するどん欲なまでの探求心に接し，決しておごり高ぶることはなく公平な視線で物事をみつめ考える姿勢というものを学んだ．受け継いでいきたいと思う．合掌．

（豊田市矢作川研究所研究員）

今なお生きる学びの志

高橋　　聡

「古川先生に手紙を出すから，読んでくれんか?」

ある日唐突に，田中先生は私に一通の手紙を手渡し，このように言われました．そんなものを私が目を通してもいいのですか，とお訊ねしながら拝見したところ，古川先生に対して，矢作川流域の社会学的研究を私がしていけるよう，指導や所内連絡を密にして欲しい，というものでした．

その当時私は，前任者である小川さんから渡された膨大な資料のデータベース公開を主務としており，毎日紙とパソコンとを交互に睨み付けるだけの日々でしたが，調査をおこない，研究・執筆をおこなうことが研究者の主たる業務であることから，それができない私の境遇を心配してくださってのことでした．

田中先生は，その手紙を出すことで，却って私と古川先生の関係がまずくなってしまうのではないかと心配され，それで事前にお手紙を見せて下さることにしたのだそうです．古川先生は，私が奉職した当初はしばしば研究所に来られて，いろいろご指導を下さいましたが，だんだん本務校での業務が多忙になり，なかなか来られなくなってしまいました経緯がありましたので，こうしたお手紙がどれ程効果を発揮するものかはわかりませんでしたが，田中先生のお気持ちが大変嬉しく感じられました．

時を同じくして，椙山女学園大学の野崎先生が，「何か調査研究をやろう，執筆してどこかの雑誌に投稿しよう，僕が指導してあげる」と言って下さったのは，もしかしたら，こうした事情を察した田中先生からも根回しもあったのではないかと思っています．お陰様をもちまして，何とか一本，文章を書き上げることができました．研究所スタッフというだけではない，研究員としての第一歩を踏み出せることになったのです．

◇

田中先生は，晩年も精力的に活動され，私たちにたくさんの宿題を残して去られました．第一の宿題は，研究所の12年史をまとめるというものでした．日に日に顔色が悪くなられていく中，毎週のようにお時間を割いて頂き，12年間の議事録をめくりながら研究所の歴史と事業の経緯についてお話し下さいました．この宿題は，今所員が総動員となって取り掛かっています．

第二の宿題は，矢作川中流の環境整備提案をまとめよう，というものでした．古鼡～越戸地域は，昔から観光，運輸，漁業，農業，電力業などさまざまな産業のキーとなる地点で，常に人びとの関心が高いところです．今日，民芸館を中

心として，この地域の景観復元が呼びかけられています．研究所は古鼡プロジェクトを始めとして，この地域については特に精力的に研究を重ねてきました．田中先生は，その成果を何らかの形で提言に結びつけることが急務であると言われ，毎週のように私たちを越戸へと連れ出してくださり，いろいろな案を考えまとめられました．今は，この成果がいつか実を結ぶよう，いろいろな方に相談に乗っていただいているところです．

第三の宿題は，矢作川流域全域の時空間把握をしよう，というものでした．いつからいつまで，どこそこには，○○がいた（いなかった），といったデータを統合して，大きな俯瞰図をつくろう，そして，いつの，どこの調査が足りないかも明確にしていこう，というものでした．その雛形として，蝶の時空間分布を把握するための図表入力をしばらくお手伝いしておりましたが，残念ながらこの先生の原稿は未完となってしまったようです．今は，こうした俯瞰図を得ることで，総合的な提言をしていけるよう，事業化を図っているところです．

◇

田中先生の残された宿題は全て，古川先生への手紙と符合しているように思われます．かつてデータベース化業務の中で手元の紙の山に埋もれてしまいそうだった私を引き揚げて下さったように，今でも，何かとままならないことが多い中でも，とにかく調査をし，とにかく研究をし，とにかく何かを書き上げることが，研究者にとってもっとも大切なことなのだ，そして，今手元にある仕事に入り込んでしまって視野を狭くするのではなく，その仕事が全体の中のどこに位置しているのかを常に意識することが重要なのだ，と叱咤激励して下さっているのだと思います．その意味では，田中先生はまだ，私たちを率いて走っておられるといえるのではないでしょうか．

（豊田市矢作川研究所研究員）

矢作川研究 No.12：86～94，2008

故 田中　蕃氏 業績目録

間野 隆裕

田中蕃氏が生前残した各種論文，著書，エッセイ，紀行文，書評，新聞投稿について年代順に掲載した．また，発見された新種の中で献名された種を一覧にした．

本目録作成にあたり，次の方にご教示頂きました．記してお礼申し上げます．
新潟青陵大学非常勤講師 …… 佐藤力夫博士
日本蛾類学会会長…… 岸田泰則氏
大阪府立大学准教授 …… 広渡俊哉博士
日本蜻蛉学会会員…… 石田昇三氏
国立科学博物館 …… 大和田守博士
静岡昆虫同好会会長 …… 北条篤史氏
名城大学教授 …… 有田豊博士
日本鱗翅学会…… 山本博子氏

ー業　績　目　録ー

1952年
ー淡路島のシルヴィアシジミ．新昆蟲 5（2）：39.（吉阪道雄共著）
ー御影でキョウトアオハナムグリを採る．MDKニュース 5（4）：7．
ー妙見地区のウラキンシジミ．MDKニュース 5（4）：7．
ークロクモスズメ11月に採集．MDKニュース 5（4）：8．
ー妙高地区のミドリシジミ♀型出現について．MDKニュース 5（4）：8．
ーアゲハの幼虫の共喰い．MDKニュース 5（4）：8．
ースジボソヤマキチョウの越夏習性．新昆蟲 5（6）：34.
1953年
ーキリシマミドリシジミを伯耆大山で採集．新昆蟲 6（7）：39.
ー採集期をひかえて武田尾案内．MDKニュース 6（2）：8．
ーウラキンシジミの交尾．MDKニュース 6（2）：9．
ー甲山地区の昆虫．MDKニュース 6（2）：9．
ー自宅庭（西宮市）でホシミスジを採集．MDKニュース 6（2）：9．
ー東六甲を開拓したこと．MDKニュース 6（4）：2-3．
1954年
ー十月．MDKニュース 7（1）：11.
ー伯耆大山におけるゼフィルス２種について．新昆蟲 7（5）：40.
ーリシャール式採卵法２種についての実験．MDKニュース 7（2）：5．
ーウラナミジャノメの新産地．MDKニュース 7（2）：14.
ーホウジャクの産卵習性．MDKニュース 7（2）：14.
ー阪神間のモンキアゲハの多産地として想像される逆瀬川宝梅園．MDKニュース 7（3）：4．
ー伯耆大山に於けるTHECLAの事など．MDKニュース 7（4）：6-9．
1955年
ー私の飼育日記より．MDKニュース 8（2）：2．
ー山口県阿武郡の蝶雑感．MDKニュース 8（5/6）：61.
ー蝶道は変化するか．MDKニュース 8（7）：77-78.
ー淡路島採集記．MDKニュース 8（7）：82-84.
ーホシミスジの三回発生に関する研究．虫同友会研究報告（1）：43-47.（若林守男・池田謹彌・小野幸夫共著）
1956年
ー再び伯耆大山のTHECLA．MDKニュース 9（1）：2-4．
ー畦野のウラキンシジミ．MDKニュース 9（1）：8．
ー標本交換の在り方．MDKニュース 9（2）：15.

1957年
－M．D．Kの将来を思う．MDKニュース 10（3/4）：1-2．
－西宮で採れたリュウキュウムラサキ．MDKニュース 10（3/4）：2．
－ヒロオビミドリシジミを兵庫県佐用郡久崎町に探して（1）．MDKニュース 10（3/4）：6．
－ウスイロオナガシジミの異常型．ニューエントモロジスト 6（4）：14．（若林守男共著）
1958年
－日本に於て未記録のリュウキュウムラサキ（バラオ系亜種）♀２頭採集される．蝶と蛾 9（2）：24．（横山史郎共著）
－本邦産*Antigius*属の異常型に対する研究．蝶と蛾 9（2）：27-29．（若林守男・菅井忠雄共著）
－ヒロオビミドリシジミの生活史．蝶と蛾 9（3）：31-33．（若林守男共著）
－ヤクシマミドリシジミの生活史．蝶と蛾 9（3）：38-39．（若林守男・林久男共著）
－京都東山連峰如意ケ岳（大文字山）でエゾミドリシジミを採集．MDKニュース 11（2）：3．
－屋久島の蝶数種の食草雑感．MDKニュース 11（2）：7-8．
－南国採集記（夏の巻その１）．MDKニュース 11（3）：22-30.
－ヒロオビミドリシジミを探してII．MDKニュース 11（4）：2-5．
1959年
－ヒロオビミドリシジミを探してIII．MDKニュース 12（1）：5-7．
1960年
－隠れた同行者と埋もれた資料．*Napi News*（36）：327-330.
－虫暦（むしごよみ）．Napi News (45)：423.
－兵庫県川辺郡猪名川町一帯の蝶．*Napi News*（37）：352.
－自然と心（Ⅰ）．MDKニュース 13（1）：31-32.
1961年
－ヤリガタケシジミ，ヒメシジミの食事について．佳香蝶 13（45）：56.
－ぜふぃるす考．佳香蝶 13（47）：119-144．（若林守男共著）
－兵庫県川辺郡の注目すべき蝶類と分布予想．MDKニュース 14（1）：8-10.
－自然と心（Ⅱ）．MDKニュース 14（1）：18.
1962年
－芸北山脈（広島県）鱗翅類採集報告．MDKニュース 15（1）：12-16.
－ミドリヒョウモン灯火に飛来．MDKニュース 15（1）：19.
－ウラギンシジミの越冬例．MDKニュース 15（1）：19．（中村一郎共著）
－兵庫県下のホシチャバネセセリの新産地．MDKニュース 15（1）：19．（小佐々茂・武田博充・若林守男共著）
－関西だより（1）．*Napi News*（49）：474.
1963年
－加賀白山採集記．佳香蝶 14（52）：90-96.（若林守男共著）
1964年
－大阪府東北部のギフチョウ．MDKニュース 17（1）：19．（若林守男共著）
1965年
－*Orthosia*並びに*Catocala*属に見られる食性およびゼフィルスの食性との類似について．佳香蝶 16（60）：129-139．（若林守男共著）
－ギフウスキナミシャク定光寺で採集．佳香蝶 17（63）：113.
－蒲原温泉（新潟県）でナミガタフタスジアオシャクを採集．佳香蝶 17（63）：114.
－ケンモンキリガ屋久島に産す．佳香蝶 17（63）：114.
－コモクメヨトウとヒメモクメヨトウの混棲地．佳香蝶 17（63）：114-115.
－ナカウスエダシャクの一食草．佳香蝶 17（63）：115.
－シロスジキンウワバは年２化．佳香蝶 17（63）：115-116.
－開田高原の蛾（第1報）．佳香蝶 17（64）：120-124.
－湯の山冬期採集．*Napi News*（54）：522.
1966年
－中央アルプス千畳敷で採集した蛾．佳香蝶 18（67）：129-131.
－開田高原の蛾（第2報）．佳香蝶 17（64）：125-128.
－開田高原の蛾（第3報）．佳香蝶 18（65）：33-35.
－寄合渡で採集した蛾．佳香蝶 18（66）：80-85.
－開田高原の蛾（第４報）．佳香蝶 18（67）：127-128.
－飛騨川流域の蛾I．佳香蝶 18（68）：139-144.
－猪名川ひとりあるきI．MDKニュース 19（1）：10-21.

－高槻北部のギフチョウの食草．MDKニュース 19（1）：40.
－モンシロチョウ，エンドウに産卵．MDKニュース 19（1）：40.
－高槻北部のクロヒカゲモドキ．MDKニュース 19（1）：40.（若林守男共著）
－京都府亀岡市東別院町のクロヒカゲモドキ．MDKニュース 19（1）：41.（若林守男共著）
－兵庫県多紀郡のクロヒカゲモドキ．MDKニュース 19（1）：41.
－兵庫県三田市のクロヒカゲモドキ．MDKニュース 19（1）：41.

1967年

－開田高原の蛾（第５報）．佳香蝶 19（69）：18-20.
－タッタカモクメシャチホコ中津川で採れる．佳香蝶 19（69）：38.
－ハイイロモクメヨトウの二産地．佳香蝶 19（69）：38.
－知立町産ヤガ２種．佳香蝶 19（69）：38-39.
－キハダケンモンの採集記録．佳香蝶 19（69）：39.
－兵庫県下でマエモンシロオビアオシャクを採集．佳香蝶 19（69）：39-40.
－神戸市摩耶山に産する大蛾類．佳香蝶 19（71）：89-104.

1968年

－北設楽郡および東加茂郡の冬期採集報告．佳香蝶 19(73)：201-202.（成瀬 善一郎・魚住 泰弘共著）
－プライヤキリバの飼育記録．佳香蝶 19(73)：203-206.
－旗鉾で採集した高山蛾２種．佳香蝶 19(73)：210.
－キバラヒメアオシャクの一食草．佳香蝶 19(73)：210.
－ハルタウスクモエダシャク新穂高で採れる．佳香蝶 19(73)：210.
－開田高原の蛾（第６報）．佳香蝶 20（74）：19-33.
－カバイロフタオ高山と旗鉾に多産．佳香蝶 20（74）：55-56.
－ウスゴマダラエダシャクを旗鉾で採集．佳香蝶 20（74）：56.
－トビスジアツバの飼育．佳香蝶 20（77）：133.
－ガマズミ葉上のアシベニカギバの幼虫．佳香蝶 20（77）：134.
－奥三河の蛾数詞査報告（1968年度）．佳香蝶 20（77）：135-142.（羽渕彰・山田真澄共著）
－オオミドリシジミ幼虫をアラカシから採集．佳香蝶 20（77）：150-151.
－スモモの葉を食うカラスシジミの幼虫．佳香蝶 20（77）：151.
－ゼフィルス幼虫の食性研究（カトカラとの関連性を中心として）．昆虫と自然 3（10）：2-6.
－猪名川ひとりあるきII．MDKニュース 21（1）：19-29.
－愛知県の蛾類研究最近の成果．*Napi News*（71）：702-704.
－“記念マッチ”の解説らしくない解説．*Napi News*（71）：704-705.
－沢谷史郎氏と語る．*Napi News*（73）：721-722.

1969年

－ヤガ科幼虫４種の記録．誘蛾燈（38）：57-58.
－トビモンオオエダシャクの一食草．誘蛾燈（38）：58.
－チャノウンモンエダシャクの一食草．誘蛾燈（38）：81.
－愛知県におけるクサビヨトウの二産地．佳香蝶 20（78）：91.
－クロコサビイロコヤガ湯の山に産す．佳香蝶 20（78）：91.
－シマアツバを湯の山で採集．佳香蝶 20（78）：91.
－スカシオビガを４月に採集．佳香蝶 21（78）：90-91.

1970年

－津具村の蛾若干の記録．佳香蝶 22（82）：32-34.
－岐阜県郡上郡北部の蛾（I）．佳香蝶 22（84）：93-135.
－New habitats of eight species of japanese moth．*Bull.Jap.Entmol.Acad.* 5（1）：17-21.
－対馬産蛾類若干の記録．蛾類通信（61）：3-7.
－屋久島春から秋の蛾．蛾類通信（71）：176-191.
－書籍紹介・杉繁郎ほか1名共著：日本産シャチホコガ科の食樹の知見．*Napi News*（82）：833.
－日本の蝶・世界の蝶（日本蝶類愛好会編）153pp．保育社．（山田義孝・川副昭人・若林守男共著）

1971年

－蝶に追いつき追いこそう．誘蛾燈（43）：17-18.
－自然を考える（1）．*Napi News*（92）：929-932.
－自然を考える（2）．*Napi News*（93）：945-946.
－自然を考える（3）．*Napi News*（94）：959-960.

－自然を考える（4）．*Napi News*（95）：971-972.
－自然を考える（5）．*Napi News*（97）：993.
1972年
－自然を考える（6）．*Napi News*（98）：1003-1004.
－自然を考える（7）．*Napi News*（99）：1011-1012.
－自然を考える（8）．*Napi News*（102）：1047-1048.
－名昆を代表するナピニュース．*Napi News*（101）：1035.
－岐阜県郡上君北部の蛾（II）．佳香蝶 24（91）：25-33.
－岐阜県郡上郡北部の蛾（III）．佳香蝶 24（93）：65-71.
－原色日本昆虫生態図鑑III　チョウ編　273pp．56pl．保育社．（福田晴夫，久保快哉，葛谷健，高橋昭，高橋真弓，若林守男共著）
1973年
－クロヒカゲ成虫の吸汁行動．佳香蝶 25（94）：６．
－ヒメキマダラヒカゲの吸蜜例．佳香蝶 25（94）：６．
－足助町でスジグロチャバネセセリを採集．佳香蝶 25（95）：40.
－愛知・岐阜両県におけるオオミスジの産地．佳香蝶 25（96）:46.
－愛知県奥三河の蛾類（I）．佳香蝶 25（97）：57-90.（羽渕彰・山田真澄共著）
－大多賀産のミヤマカラスアゲハ幼虫に見られた色彩変異．佳香蝶 25（97）：103.
－自然を考える（9）．*Napi News*（106）：1079-1080.
－鈴鹿有料道路建設に関連したキリシマミドリシジミの研究III　幼虫の生態に関する知見．鈴鹿公園有料道路建設にともなう自然科学調査報告書：111-122.
－カラー自然ガイド　日本の蝶I．151pp．保育社．（高橋昭・若林守男共著）
－カラー自然ガイド　日本の蝶II．151pp．保育社．（高橋昭・若林守男共著）
1974年
－オオミスジの生息環境と幼虫の食性．佳香蝶 26（100）：61-68.
1975年
－西表島におけるタイワンキチョウの生態．蝶と蛾 26（2）：61-73.
－ミツボシモンシロモドキの西表島における発見．佳香蝶 27（104）：54.
－愛知県におけるクビグロケンモンの分布と生態．誘蛾燈（60）：25-28.
－ヤガ科幼虫の記録の訂正．誘蛾燈（60）：28.
－シロテンキヨトウ成虫の摂食行動．誘蛾燈（60）：29.
－アザミは捕虫植物か．誘蛾燈（60）：30.
1976年
－落葉樹林の季節変化と鱗翅類の生活史．MDKニュース 26：24-35.
－Zephyrusの自然誌（1）．月刊むし（62）：３-８．
－Zephyrusの自然誌（2）．月刊むし（63）：９-14.
－Zephyrusの自然誌（3）．月刊むし（65）：５-12.
－Zephyrusの自然誌（4）．月刊むし（66）：３-6.
－Zephyrusの自然誌（5）．月刊むし（67）：３-8.
－Zephyrusの自然誌（6）．月刊むし（69）：９-14.
－*Pieris*雑記（1）．佳香蝶 28（105）：１-15.
－日本未記録の*Dinumma*属の1種（ヤガ科シタバガ亜科）とその食草．佳香蝶 28（107）：39-40.
－エドヒガンの枝からカラスシジミ前蛹の発見．佳香蝶 28（107）：41.
1977年
－Zephyrusの自然誌（7）．月刊むし（70）：３-８．
－Zephyrusの自然誌（8）．月刊むし（71）：９-12.
－Zephyrusの自然誌（9）月刊むし（72）：11-14.
－愛知県の注目すべきヤガ2種．佳香蝶 29（112）：59-60.
－梢のダンサー　フィニッシュのポーズはなに（アマミウラナミシジミ）．*TSUISO*（116）：1-5.
1978年
－日本産*Ladoga*属の幼虫期の食草と分布．蝶と蛾 29（1）：35-45.
1979年
－第２回自然環境保全基礎調査（愛知県）．鱗翅目．動物分布調査報告書（昆虫類）：44-46, 67-83．環境庁編．（有田豊共同担当）．
－（談話会）*Pieris*の研究をめぐって．蝶 3：20-71．（阿江茂・日浦勇・北条篤史・川副昭人・大崎直太・高橋昭・高橋真弓・若林守男共編）

1980年

－森の蝶・ゼフィルス　215pp．築地書館．

－環境の人工化とアゲハチョウ科の棲息分布．ちょうちょう 3（8）：2-34．（日浦勇・江本純・福田晴夫・佐藤正孝・高橋真弓・若林守男共著）

1981年

－チョウの翅２題．*TSUISO*（304）：1-7．

1982年

－愛知県の大蛾類．昆虫と自然 17（12）：20-21．

－原色日本蝶類生態図鑑（I）　277pp．64pl．保育社．（福田晴夫・浜栄一・葛谷健・高橋昭・高橋真弓・田中洋・若林守男・渡辺康之共著）

－春日井市の昆虫6　鱗翅目（蛾類）　51pp．春日井市．（佐藤正孝・松井一郎・伊東萬吉共著）

1983年

－東三河地区昆虫実態調査．159pp．東海自然環境研究会．（佐藤正孝・有田豊・寺村重一・脇田治・石田勝義・久野武顕・瀬野直人共著）

－書評・下山健作著「つがるの蝶」．*Napi News*（189）：1805．

－書評・蛭川憲男著「木曾谷の蝶」．*Napi News*（190）：1810．

－原色日本蝶類生態図鑑（II）　325pp．64pl．保育社．（福田晴夫・浜栄一・葛谷健・高橋昭・高橋真弓・田中洋・若林守男・渡辺康之共著）

1984年

－原色日本蝶類生態図鑑（III）　373pp．72pl．保育社．（福田晴夫・浜栄一・葛谷健・高橋昭・高橋真弓・田中洋・若林守男・渡辺康之共著）

－原色日本蝶類生態図鑑（IV）　373pp．64pl．保育社．（福田晴夫・浜栄一・葛谷健・高橋昭・高橋真弓・田中洋・若林守男・渡辺康之共著）

－愛知文化シリーズ（3）愛知の動物：142-174（蛾類），愛知県郷土資料刊行会．

1985年

－今月の虫－アカシジミ．インセクタリウム 22（6）：9．

－愛知県猿投山で採集した注目すべき蝶類．佳香蝶 37（141）：6．

－ウスバシロチョウの矢作川水系における分布の拡大．佳香蝶 37（142）：25-26．

－愛知県境投山でヒメハルゼミの鳴き声を聞く．佳香蝶 37（142）：32．

－焚火に集まった白い蝶は?．*Napi News*（202）：1907．

1986年

－豊田市でヨコズナサシガメを採集．佳香蝶 38（145）：9．

－ウスバシロチョウの矢作川水系における分布の拡大（2）－1985年の調査．佳香蝶 38（145）：10．

－豊田市におけるカマキリ２種の記録．佳香蝶 38（147）：46．

1987年

－ウスバシロチョウの矢作川水系における分布の拡大（3）－1986年の調査．佳香蝶 39（146）：16．

－豊田市のヨコヅナサシガメのその後．佳香蝶 39（149）：1-12．

－チョウのはなし（I）　245pp．久保快哉編，技報堂出版．（今井彰・宇野正紘・大島良美・浜栄一・牧林功共著）

－チョウのはなし（II）　222pp．久保快哉編，技報堂出版．（今井彰・宇野正紘・大島良美・浜栄一・牧林功共著）

1988年

－蝶による環境評価の一方法．蝶類学の最近の進歩（日本鱗翅学会特別報告第6号）：527-566．

1989年

－チョウの自然誌（18）環境指標としてのチョウ．日本の生物 3（6）：61-69．

－昆虫から見た豊田市の自然　55pp．矢作新報社．

1991年

－愛知県のチョウ類．愛知県の昆虫（下）：21-95，愛知県．（高橋昭・葛谷健・阿江茂・窪田宣和・中野善敏・鈴木哲彦・広沢義雄・村岡修二・大曽根剛・横地鋭典・鈴木友之共著）

－愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下）：96-416，愛知県．（間野隆裕・田中多喜彦・有田豊・宗川元章・三浦重光・山田真澄共著）

－環境階級存在比（ER）による環境評価法．第2回蝶類の保護セミナー「蝶類の保護・・・自然保護の一環として」資料集：85-92．日本鱗翅学会第2回セミナー委員会．

1992年

－調べてみませんか……矢作川のウスバシロチョウ．*Napi News*（241）：2271．

1993年

－やはぎ論壇　自然保護の原点は自然界からの正確な情報．矢作新報1993年２月５日号

－豊田市虫瞰図　寒冷期に生きる冬尺蛾．矢作新報1993年３月５日号
－豊田市虫瞰図２　ギフチョウは救えるか．矢作新報1993年４月２日号
－豊田市虫瞰図３　サナエトンボのいる風景．矢作新報1993年５月14日号
－豊田市虫瞰図４　食・食虫植物・動物．矢作新報1993年６月４日号
－豊田市虫瞰図５　郷愁の昆虫酒場は・・・．矢作新報1993年７月２日号
－豊田市虫瞰図６　河川の緑とオオムラサキ．矢作新報1993年８月６日号
－豊田市虫瞰図７　川のダイナミズムに頼る陸生昆虫．矢作新報1993年９月３日号
－豊田市虫瞰図８　漂チョウのふるさと．矢作新報1993年10月１日号
－豊田市虫瞰図９　三河の国で讃岐の国の昆虫騒動．矢作新報1993年11月５日号
－豊田市虫瞰図10　永続きしない昆虫の異常発生．矢作新報1993年12月３日号

1994年

－愛知県におけるスジモンフユシャクの記録．誘蛾燈（135）：19-20．（宮崎弘規・水野利彦共著）
－豊田市虫瞰図11　アゲハチョウ公園．矢作新報1994年１月１日号
－豊田市虫瞰図12　虫を育む自然の構図．矢作新報1994年２月４日号
－矢作川水辺叙情１　柳の木立ちに思う．矢作新報1994年３月４日号
－矢作川水辺叙情２　心をつくる川．矢作新報1994年４月１日号
－矢作川水辺叙情３　樹雨の面ノ木峠．矢作新報1994年５月13日号
－矢作川水辺叙情４　飛燕の早技．矢作新報1994年６月３日号
－矢作川水辺叙情５　寄らば大樹の陰で．矢作新報1994年７月８日号
－矢作川水辺叙情６　ニレ科樹木の御三家．矢作新報1994年８月５日号
－矢作川水辺叙情７　荒れてこそ川．矢作新報1994年９月２日号
－矢作川水辺叙情８　どじょう汁記．矢作新報1994年10月７日号
－矢作川水辺叙情９　千曲川と矢作川．矢作新報1994年11月４日号
－矢作川水辺叙情10　橋は誰のためのものか．矢作新報1994年12月２日号

1995年

－矢作川流域のウスバシロチョウ．昆虫と自然 30（13）：14-19.
－昆虫類．墓園自然環境等調査委託報告書：87-137．豊田市．（岩月学・朏雅治・小林広成共著）
－蝶を呼ぶ公園づくりの試み．インセクタリウム 32（11/12）：26-29.
－中国石人山調査行印象紀（Ⅰ）．やどりが（162）：３-11．日本鱗翅学会．（木暮翠・大島良美・間野隆裕共著）
－中国石人山調査行印象紀（Ⅱ）．やどりが（163）：２-6．日本鱗翅学会．（木暮翠・大島良美・間野隆裕共著）
－矢作川水辺叙情11　原風景のルーツ．矢作新報1995年１月６日号
－矢作川水辺叙情12　丘陵地の細い流れ．矢作新報1995年２月３日号
－矢作川水辺叙情13　指で字の書ける石．矢作新報1995年３月３日号
－矢作川水辺叙情14　私たちの望む川の水．矢作新報1995年４月21日号
－矢作川水辺叙情15　たくましきシルバー．矢作新報1995年５月12日号
－矢作川水辺叙情16　自然母体への回帰を．矢作新報1995年６月２日号
－矢作川水辺叙情17　浜辺の歌が唱えない．矢作新報1995年７月７日号
－矢作川水辺叙情18　ホタルが教える人生模様．矢作新報1995年８月４日号
－矢作川水辺叙情19　アユ・その種の尊厳．矢作新報1995年９月１日号
－矢作川水辺叙情20　自然環境の戸籍原本を．矢作新報1995年10月６日号
－矢作川水辺叙情21　川と海の物質循環に思う．矢作新報1995年11月３日号
－矢作川水辺叙情22　尊大さへの恥らい．矢作新報1995年12月１日号

1996年

－昆虫．豊田市内陸工業用地自然環境調査報告書：71-110．豊田市自然愛護協会．（岩月学共著）
－市長・会長を囲む座談会「都市の中の多様性」．田中蕃・有田豊共編　日本産蝶類の衰亡と保護・第４集：１-29.
－愛知県豊田加茂広域圏のギフチョウ生息地．田中蕃・有田豊共編　日本産蝶類の衰亡と保護・第４集：39-48.
－矢作川水辺叙情23　ひと一代の体験．矢作新報1996年１月５日号
－矢作川水辺叙情24　春遠からじ・冬景色．矢作新報1996年２月２日号
－矢作川水辺叙情25　冬なればこその光景ありて．矢作新報1996年３月１日号
－矢作川水辺叙情26　山がすみに春を見る．矢作新報1996年４月５日号
－矢作川水辺叙情27　空を泳ぐ鯉たち．矢作新報1996年５月３日号
－矢作川水辺叙情28　樹海の波頭と滝．矢作新報1996年６月７日号
－矢作川水辺叙情29　草のみどり．矢作新報1996年７月５日号
－矢作川水辺叙情30　時の流れ・川の流れ．矢作新報1996年８月２日号

－矢作川水辺叙情31　川らしさへの思い．矢作新報1996年９月６日号
－矢作川水辺叙情32　スズメバチは何を語るか．矢作新報1996年10月４日号
－矢作川水辺叙情33　秋の川辺・帰化植物の賑い．矢作新報1996年11月１日号
－矢作川水辺叙情34　川の輝きの正体は．矢作新報1996年12月６日号

1997年

－矢作川流域の自然（その概要）．矢作川研究 １：７-44.
－矢作川河岸・越戸平井地区の昆虫．矢作川研究 １：81-107.（蟹江昇・高橋啓太・白金晶子共著）
－砂利投入による河床構造回復の試みとその効果．矢作川研究 １：175-202.
－矢作川水辺叙情35　空しさと生きがいと．矢作新報1997年１月10日号
－矢作川水辺叙情36　風景をとりもどす平常感覚．矢作新報1997年２月７日号
－矢作川水辺叙情37　竹の泣く声．矢作新報1997年３月７日号
－矢作川水辺叙情38　竹林がヤブツバキ林に．矢作新報1997年４月４日号
－矢作川水辺叙情39　心のゆらぎあればこそ．矢作新報1997年５月２日号
－矢作川水辺叙情40　地球規模と矢作川・・・混濁の思考．矢作新報1997年６月６日号
－矢作川水辺叙情41　高みの見物で良いのか．矢作新報1997年７月４日号
－矢作川水辺叙情42「のどかさ」考．矢作新報1997年８月１日号
－矢作川水辺叙情43　落差ずくめの世の中．矢作新報1997年９月５日号
－矢作川水辺叙情44「緑」のひとり歩きを憂う．矢作新報1997年10月３日号
－矢作川水辺叙情45　森の多様性をつくる動物たち．矢作新報1997年11月７日号
－矢作川水辺叙情46　再「のどかさ」考．矢作新報1997年12月５日号

1998年

－矢作川河岸・平成記念橋～高橋間の昆虫．矢作川研究 ２：33-73.（蟹江昇・間野隆裕・白金晶子共著）
－砂利投入による河床構造回復の試みとその効果　II．矢作川研究 ２：191-223.
－矢作川のさまざまな生き物　－ウマノスズクサとジャコウアゲハ－．*Rio*（1）：３.
－復権させたいハンノキ林の価値．*Rio* ８：３.
－矢作川水辺叙情47　触れることの大切さ．矢作新報1998年１月９日号
－矢作川水辺叙情48　自然から学ぶモラル．矢作新報1998年２月６日号
－矢作川水辺叙情49　川の生き物は今，何を語る?．矢作新報1998年３月６日号
－矢作川水辺叙情50　目覚める心・川は原点．矢作新報1998年４月３日号

1999年

－矢作川河岸　高橋～野見公園間の昆虫．矢作川研究 ３：35-79.（蟹江昇・間野隆裕・有田玲子・白金晶子共著）
－二つの人工的自然公園で見られるようになった蝶類．矢作川研究 ３：117-133.
－砂利投入による河床構造回復の試みとその効果　III．矢作川研究 ３：203-246.
－児ノ口公園が投げかけた問題－回廊（コリドー）の在り方に深い議論を!－．*Rio*（9･10）：2-3.

2000年

－矢作川河岸　野見公園～鵜の首橋間の昆虫．矢作川研究 ４：19-59.（蟹江昇・間野隆裕・有田玲子・白金晶子共著）
－砂利投入による河床構造回復の試みとその効果　IV．矢作川研究 ４：135-141.
－古鼡プロジェクト生物班員の川への思い．*Rio*（25）：１-２.
－豊田の昆虫V ＜チョウとガ＞：119pp．豊田市自然愛護協会編，豊田市自然保全課.
－いきいき　生きもの観察自然ガイド．196pp．三河生物同好会編，風媒社.（青山正宏ほか40名共著）

2001年

－『中流域の河辺環境』特集にあたって．矢作川研究 ５：１-２.
－矢作川の河川環境－昆虫と植物の視点から－．矢作川研究 ５：３-12.（洲崎燈子共著）
－矢作川中流域の堤外地における植生と土地利用の変遷　1　結果概要と植生との関係．矢作川研究 ５：27-45.
－矢作川中流域の堤外地における植生と土地利用の変遷　5　チョウ類から見た河辺の環境評価．矢作川研究 ５：79-93.
－ヒメウラナミジャノメこの凡種の非凡さ．*Rio*（39）：１.
－旭町の昆虫：413pp.（財）旭高原自然活用村協会.（阿江茂ほか32名共著）

2002年

－自然公園づくりとチョウ類の生息状況．森誠一編，環境保全学の理論と実践Ⅱ：82-100．信山社サイテック.
－矢作川における平成12年９月「東海豪雨」の影響．矢作川研究 ６：125-138.
－連載　矢作川のいきもの２　決闘!クマバチ対オサムシ．*Rio*（51）：４.

2003年

－第５章川と魚の病　１矢作川の汚濁・歴史と現状　２川の疲弊．矢作川漁協100年史編集委員会編，環境漁協宣言：259-288．矢作川漁業協同組合.

－古鼡横断面の生物．矢作川研究 7：33-104.（内田朝子・洲崎燈子・小沢康彦共著）
－平成14年　献上鮎料理顛末記 1．*Rio*（56･57）：3．
－平成14年　献上鮎料理顛末記 2．*Rio*（59）：4．
－平成14年　献上鮎料理顛末記 3．*Rio*（61）：3．

2004年

－古鼡の今昔　－矢作川の将来像を考えるために－．矢作川研究 8：61-64.（内田朝子・洲崎燈子・小川都共著）
－生物の生息に配慮した堤防の草刈り手法の検討．矢作川研究 8：149-169.（洲崎燈子共著）
－NAPI NEWS「ポスト･イット」論．*Napi News*（300）：2836.
－越戸の中州に思う環境復元論．*Rio*（73）：1．
－10年目・言わず語らずの話．*Rio*（76）：3．
－名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物　レッドデータブックなごや2004 ー動物編ー. ⑥昆虫類p121-230.（佐藤正孝・安藤尚・高崎保郎・長谷川道明・岡田正哉・尾藤成人共著）

2005年

－第19章環境評価と環境インパクト．本田圭一・加藤義臣編，チョウの生物学：567-596．東京大学出版会.
－平成16年度・研究所の活動．*Rio*（83）：1．
－ミドリシジミが山田川ビオトープに自然繁殖．*Rio*（88）：3．
－豊田市自然環境基礎調査報告書．本編Ⅶ昆虫類．p.181-323．資料編Ⅴ昆虫類．p.105-385．愛知県豊田市.（間野隆裕・蟹江昇・高橋匡司・岩月学・小林広成・有田玲子・山田真澄共著）

2006年

－市民の健康診断と連携した検証方法を探す．蔵治光一郎・洲崎燈子・丹羽健司編，森の健康診断：98-99．築地書館.（阿部晃久共著）
－東三河地方から矢作川流域に拡散定着したウスバシロチョウ．矢作川研究 10：51-74.
－平成17年度・研究所の活動．*Rio*（94）：1．
－名昆生え抜きの学者を失う．*Napi News*（308）：2984.
－追いつめられた生きものたち 1 共生の相手を知りたい．矢作新報2006年４月21日号
－追いつめられた生きものたち 2 遠くにある自然の叡智．矢作新報2006年４月28日号
－追いつめられた生きものたち 5 ミヤマチャバネセセリ．矢作新報2006年５月26日号
－追いつめられた生きものたち 19 ゴマシジミ．矢作新報2006年９月８日号
－追いつめられた生きものたち 30 ウラギンヒョウモン．矢作新報2006年11月24日号

2007年

－追いつめられた生きものたち 38 ツマグロキチョウ．矢作新報2007年２月２日号
－追いつめられた生きものたち 42 ホシチャバネセセリ．矢作新報2007年３月２日号
－追いつめられた生きものたち 48 スジボソヤマキチョウ．矢作新報2007年４月13日号
－追いつめられた生きものたち 51 チャマダラセセリ．矢作新報2007年５月11日号（遺稿）

新種発見献名等

田中蕃氏は日本のみならず東南アジアを中心とする世界各地に出かけられ，昆虫類を調査された．その際得られた未知種について，各研究者に研究を委ねられ，多くの新記録や新種記載がなされた．

ここではそのうちガ類について，田中蕃氏に献名された新種を一覧にした．

・ミカワキヨトウ *Mythimna bani*（Sugi, 1977）（ヤガ科）
田中蕃氏が愛知県豊田市井山（旧稲武町井山）で1968年７月20日及び愛知県設楽町裏谷で1968年７月27日から1973年８月４日にかけて採集した個体がParatypeに指定されている．
原　典：Sugi, S.,（1977）The Placida group of the genus *Aletia* Hübner, with descriptions of two new species（Lepidoptera: Noctuidae, Hadeninae）．*Trans. lepid. Soc. Japan* 28：55-60.
・チョウセントガリバ *Tethea ocularis tanakai* Inoue, 1982（カギバガ科）
田中蕃氏が長野県開田村西野で1968年８月18日に採集した♂がHolotypeに指定されている．
原典：井上寛（1982）トガリバガ科．井上寛ほか，日本産蛾類大図鑑 1：420．講談社.
・タナカヒメシャク *Idaea tanakai* Sato, 1994（シャクガ科）
田中蕃氏が愛知県豊田市猿投山で1978年７月30日に採集した♀がHolotypeに指定されている．
原典：佐藤力夫（1994）日本産ヒメシャク亜科の3新種．蛾類通信 179：57-60.
・クシヒゲコケガ奄美以南亜種 *Thumatha ochracea bani*（Kishida & Mano, 1997）（ヒトリガ科）
間野隆裕が西表島船浦で1995年５月21日に採集した♀がHolotypeに指定されている．
原典：岸田泰典・間野隆裕（1997）西表島マングローブ林で採集されたクシヒゲコケガの一新亜種．蛾類通信 193：300.
・*Psilalcis bani* Sato, 1998（シャクガ科）

田中蕃氏がフィリピンのネグロス島で1997年４月29日に採集した♂が Holotypeに指定されている．
原典：Sato, R.,（1998）Descriptions of two new species closely related to *Psilalcis subfasciata*（Warren）（Geometridae, Ennominae）from the Philippines．*Trans. lepid. Soc. Japan* 49：107-110.
・*Diplurodes tanakai* Sato, 1999（シャクガ科）
田中蕃氏がフィリピンのネグロス島で1997年４月29日採集にした♂が Holotypeに指定されている．
原典：Sato, R.,（1999）Descriptions and records of the genus *Diplurodes* Warren（Geometridae, Ennominae）from the Philippines. *Trans. lepid. Soc. Japan* 50：267-280.
・*Achelura bani* Owada & Horie, 1999　（マダラガ科）
田中蕃氏がベトナムのタムダオで1997年11月４日に採集した個体がPalatypeに指定されている．
原典：Owada, M., K. Horie & Xue, D.,（1999）Three new chalcosiine moths of the genus *Achelura*（Lepidoptera, Zygaenidae）from the northern Indo-Chinese Peninsula and southwestern China．*Tinea* 16：20-28.
・*Schimia tanakai* Gorbunov & Arita, 2000　（スカシバガ科）
田中蕃氏がベトナムのタムダオで1996年５月７日に採集した♀がHolotypeに指定されている．
原典：Gorbunov, O. G. & Y. Arita,（2000）Study on the Synanthedonini（Lepidoptera, Sesiidae）of Vietnam．*Japan. Journal. Sys. Ent.* 6（1）：85-113.
・*Heterosphecia bantanakai* Arita & Gorbunov, 2000　（スカシバガ科）
田中蕃氏がベトナムのクックフォーンで1998年４月24-28日に採集した個体がParatypeに指定されている．
原典：Arita,Y. & O.G.Gorbunov（2000）Notes on the tribe Osminiini（Lepidoptera, Sesiidae）from Vietnam, with descriptions of new taxa．*Trans, lepid. Soc. Japan* 51（1）：49-74.
・アンマーキマエクロホソバ *Ghoria bani* Kishida, 2006（ヒトリガ科）
田中蕃氏が台湾の鞍馬山で1997年７月27-30日に採集した♂が Holotypeに指定されている．
原典：岸田泰則（2006）台湾の*Ghoria collitoides* Butler キマエクロホソバについて．蛾類通信 238：235-237.
・*Dasyboarmia bantanakai* Sato, 2007（シャクガ科）
田中蕃氏がフィリピンのミンダナオ島で1996年８月16-17日に採集した♂が Holotypeに指定されている．
原典：Sato, R.,（2007）Two new species of the genus *Dasyboarmia* Prout（Geometridae, Ennominae）from Java, Indonesia and Mindanao, the Philippines．*Tinea* 20（1）：１-５.
・*Nemophora tanakai* Hirowatari, 2007（ヒゲナガガ科）
田中蕃氏がベトナムのタムダオで，1998年５月４日に近縁の*N. fluorites*（Meyrick）を採集（ベトナム初記録）したのを契機に，同行した広渡俊哉氏が同じ場所で本新種を採集したことから田中氏に献名された．
原典：Hirowatari ,T.（2005（2007））　Notes on *Nemophora* in Vietnam, with description of a new species（Lepidoptera: Adelidae）．*Tropical Lepidoptera* 16（１-２）: 27-34.